九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「筑豊近代化大年表」誕生記

深町, 純亮
麻生社史資料室顧問 | 前飯塚市歴史資料館長

https://doi.org/10.15017/13781

出版情報：エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 17, pp.247-251, 2002-03-25. 九州大学石炭研究資料センター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「筑豊近代化大年表」誕生記

深町純亮

一

筑豊が旧国名の筑前、豊前の頭文字を合わせたものであることはいうまでもないが、この呼称が生まれるのは明治十八年「筑前国豊前国石炭坑業組合（同二十六年「筑豊石炭鉱業組合」と改称）」結成以来のことである。筑・豊の両州にまたがる遠賀川流域で石炭を産出する五郡（遠賀、鞍手、嘉麻、穂波、田川郡）のみを包括した呼称であり、二州全体からみれば筑前十五郡、豊前六郡のほんの一部しか含まれないが、これは産炭地という等質性の上に立った経済的、歴史的、地域的な呼び名であり、全国ただひとつといっていいほどの特異な地域呼称である。

筑豊における石炭発見の歴史は遠く文明十（一四七八）年に遡る（「横谷貞明記」）が、旧幕時代は福岡、小倉藩ともに焚石仕組法を定めて石炭を一種の統制経済下におき、その収益を藩費に充てていたものの、採掘規模はきわめて零細であり、「狸掘り」と称される原始的なものであった。

明治二年、大政官によって鉱山開放令が出され、石炭採掘は一応自由化される。しかし採炭方式は依然江戸期と大差のないものであった。同十四年旧肥前大村藩士、杉山徳三郎による蒸気ポンプの坑内導入が排水面での画期的な成功をもたらし、これと併行しつつ生産、運搬の機械化も徐々に進められ、人力採炭から汽力採炭時代へと推移していった。

明治二十年代以降、中央資本の相次ぐ筑豊進出によって大規模且つ組織的な石炭鉱山開発が進められる一方、輸送手段も従来からの川舟（艀）に代わるものとして鉄道の建設が開始され、筑豊全域に網の目のように鉄道網が張りめぐらされる。江戸期までは豊沃な田園地帯であった遠賀川流域の様相も一変して活気溢れる石炭産業の降盛地に変貌していった。以来、石炭はわが国近代化を支える文字どおりのエネルギー源となり、また戦後経済の復興に大きな貢献を果たしてきた。その石炭をおよそ一世紀にわたって、全国総出炭のほぼ半数近くを供給し続け、昭和三十年代後半からのいわゆるエネルギー革命によって、筑豊炭田はその終焉を迎えることとなったわけである。

石炭産業には地下産業としての特異性がいくつかあるが、多少の機械化が進められてもなお多くの人手を要する事業であり、それぞれの炭鉱が一個の地域社会を構成し、大手のヤマになると優にひとつの地方自治体に匹敵するほどの人口を有する生活圏を形成していた。例えば麻生最後のヤマとなった吉隈炭鉱は最盛期には約二千五百人の従業員を擁し、家族を含めるとおよそ一万人が生活していて、これは現在の嘉穂郡庄内町、嘉穂町の人口とほぼひとしく、嶺田町、碓井町を上廻る人口である。炭鉱は完全な生活共同体であり、運命共同体であるといえるが、経営形態に多少の差異はあっても、炭鉱独得の気風、生活組織や様式には共通する部分がきわめて多く、筑豊地域は最盛期百万に近い人口を有する巨大な生活共同体であったといえよう。

遠賀川流域は縄文、弥生の古代から豊かな文化が栄え、豊穣な沃野と純朴な人情の里であったが、前述のように明治以降地域経済の基本が一変し、国全体の近代化と併行しつつ、時には先駆的な社会的役割を果たしながら独特の近代化形成の過程をたどり続けてきた。その足どりは少なからず波瀾に富み、全国的にも特殊な存在であったといえる。

二

終戦間もなくのころから石炭会社に奉職し、幾変転を経た戦後の石炭界を身をもって体験、その終末を見届けた私にとって筑豊の山河には言いあらわし得ない愛着があり、明治以降のその歩みを年表の形式で整理しておきたいとの思いを持つようになったのは昭和五十年代のはじめのころであった。

以来、総合年表をはじめとする各年表、各種文献、自治体史、業界史、新聞記事や縮刷版などから、筑豊に関する事柄を丹念に拾いあげ、一事項を一枚のカードに収める作業を開始した。本来の勤務の間を縫ってのことである。もちろん締切りがあるわけではなく、気分的には至って気楽で楽しい作業であった。カードは古い名刺の裏を使ったり、ケント紙を買ってきて名刺大に切ったものを使ったが、カードの束が少しづつふえてゆく喜びはやった本人にしかわからないことであろう。

筑豊の歩みが孤立したものではなく、当然に国や県全体の動きと連動する部分も多く、鎖国時代の閉鎖国家から世界の一流国として急速に成長していく日本の政治、経済、社会、教育、文化の各方面にわたる枢要な事項の進展を追うことも、近代筑豊の時代的背景の推移を浮きあがらせる必然のものとしてカード化を進めていった。私個人の趣味的な範囲に属することだが、ときどきの世相人心を象徴する流行歌や流行語、東西の主な文学作品や著作物、映画、音楽なども年表に彩りを添えるものとして収録していった。

郷土史を含めた歴史一般や産業史を研究する場合、年表が必要不可欠のものであることはいうまでもない。筑豊石炭史の解明をライフワークとしている私は研究や学習のテーマごとにいろいろの年表を使用してきた。筑豊周辺については各自治体誌（史）や、とくに田川郷土研究会によって昭和四十八年に刊行された「筑豊石炭砿業史年表」などをフルといっていいくらい活用してきた。

ところがまず砿業史年表についていうと、あまりにも大著にすぎて、さまざまの事項がびっしりと収載され、こまかな事項を調べるときはこれ以上のものはないという貴重な労作である反面、大筋での流れをつか

むのには余りにも詳細すぎるという一面もある。さらに敢えて言わせていただければ「索引」がついていないことは本年表の致命的な欠陥ともいうべきで、必要な事項を引き出そうとするとき一発でみつけることは容易でない。例えば三井鉱山が田川採炭組を買収した時期を調べようとするとき、およその年代に見当をつけてその周辺を何ページも繰ってみつけ出すほかはない。また、各自治体誌（史）も収録の範囲が限られていて、いわば筑豊全体からの視点にとぼしいうらみがある。

そこで、筑豊という地域に限った年表をこれらの諸文献から収約できないか、また砿業史年表の要点のみを抽出した見やすい年表がほしいと思うようになったわけである。さらに砿業史年表は昭和四十三年で結了している。最も波瀾に富んだエネルギー革命の終末期であり、昭和四十八年の貝島大之浦炭鉱の閉山を最後とする筑豊炭田全体の終焉前後や、これに引き続く石炭亡きあとの筑豊の生きざまを補完する目的を含めての筑豊総合年表が出来たらと思ったのが、そもそもの発想の原点であった。

三

こうして十数年を経た平成七年ころ、カードは一万枚を越えるに至った。しかしただ溜ったというだけで、このままでは何の活用もできない。ある事柄がいつ起こったかを知りたいと思っても、一万のカードを繰ってみるということは不可能だからである。そこでこのカードを時系的に並べて整理し、バインダーノートに年月日順に転記するという第二段の作業にとりかかった。根気を要する膨大な作業である。

一年以上かかって明治、大正・昭和戦前、昭和戦後・平成の三冊と索引一冊の合計四冊のノートが一応出来上った。その後も目につく限りの資料から未収載の事項を拾いあげて補入することを続け、現在に至るまでノートの補遺補完を日常的に行っている。

完成してみると、われながら便利この上ないものとなった。私は筑豊の各地で講演を依頼されることも多いが、レパートリーに応じてのレジュメ作成に必要な事項はこの四冊のノートから即座に取り出せる。数年前、筑豊では珍らしい大きめの地震があり、新聞社から筑豊での地震記録の問い合わせがあったとき、すぐに回答できたことなどは、ほんのひとつの活用例である。

昭和四十一年、飯塚市に開学された近畿大学九州工学部は地域に開かれた大学ということを開学以来の基本理念のひとつとされるが、昭和六十二年に開架方式の新図書館が完成、地域と密着した開放型図書館として運営されてきた。その中に「地域資料室」が設置され、平成八年からその運営委員会がスタート、学外の郷土史家、有識者数名に大学のスタッフが加わった十名前後のメンバーでの運営が開始された。

私も当初からその委員を委嘱されたが、発足早々の委員会でまったくの茶飲み話のような形でこの自作年表に言及した。ところが思いもかけず、委員各位がこれに強い関心を寄せられ、地域資料室の最初の形ある事業として、これを出版しようということになった。まさに瓢箪から駒である。私の分類ノートに従って明治編、大正編、昭和戦前編、昭和戦後編の四分冊とし、年に一冊ずつ四年計画での刊行という基本方針が決まり、大学の教授会もこれに同意、本学（大阪）から予算化も承認されて、出版業務がその緒についた。平成十年夏のことである。

手書きのノート稿本がいつの日か活字化されることを、漠とした夢みたいに思ってはいたものの、あまりにも早い夢の実現は嬉しさを通り越して信じられない思いであった。初校のゲラがずしりと私の机の上に置かれたときは、二十年来の夢がとうとう現実になったと、まさに感無量であった。

袖崎栄一（労働法）、永原丞（労働経済論）の両教授が私の原稿をパソコンに入力され、印刷製本は飯塚市内の共和印刷が採算無視で全面的に協力されることとなり、出版への工程は順調に軌道に乗っていった。

各ページを石炭と一般の二欄に分け、筑豊に関する事項は両欄ともにゴシック体とし、研究者の便のため各事項の典拠はそれぞれ番号を付すこととした。また年度によっては大きな空白が生じるページもあり、五、六十葉の写真でそのブランクを埋めることも行い、目で見る楽しみとともに「読みもの風の年表」にしたいと心がけつつ入念な校正を先生方と一緒に続けていった。

そして平成十一年八月、第一巻の「明治編」A4判二二〇ページ全五百冊が納本された。その半数が各大学や高校、図書館、地元自治体、公共団体などに寄贈され、残余は福岡市、飯塚市の書店で市販されたが、現在残部はほとんど無いと聞く。

四

明治編には「年報」という小型十ページの小冊子が折込みとして付けられている。これには地元出身の麻生太郎衆議院議員、佐々木哲哉田川市石炭資料館館長、鹿田則光直方市石炭記念館館長、香月靖晴嘉飯山郷土史研究会会長、郷土史家で日本民族学会会員の中島忠雄氏、桑原三郎近畿大学名誉教授がそれぞれユニークな小文を寄せられ、筑豊炭田史の側面を彩る格好の読みものとなっている。

「解題」は袖崎教授と私が担当、巻末に相当のページをさいて「索引」をつけているが、各項目には掲載ページではなくその事項が発生した年月を表示している。事件の発生年月のみを知りたいときは、本文を見るまでもなく索引だけでことが足りることもあるわけである。

翌平成十二年に第二巻「大正編」二五〇ページが刊行された。大正時代は十五年間しかなく、明治の四十五年間に比べると三分の一である。従っておよそのページ数を合わせるため「炭鉱用語事典」を収録することとした。炭鉱社会には一般の人々が理解しにくい特殊な用語がいくつもあり、これらを解説した文献にもとぼしい。苦心を重ねて八六〇の用語を五十音順に並べ、それぞれをわかりやすく解説した。石炭政策やエネルギー革命、労働争議、ヤマの人情風俗、生活用語なども採り入れたことは、従来の類書にはないことである。

また、袖崎教授の創意によって出来るだけ多くのイラストを挿入したことも本事典の特色である。さらに寄稿論文として桑原三郎近畿大学名誉教授の「大正期の炭鉱住宅」と、川上秀人近畿大学教授・松岡高弘有明工業高等専門学校助教授共作の「筑豊の炭鉱主の住宅―麻生家と貝島家の住宅―」を頂戴し、本年表の資料的価値を大いに高めることができた。

大正編も残部僅少と聞く。

平成十三年十月、第三巻「昭和戦前編」が刊行された。ページ数は当初の予定をはるかにオーバーして二八六ページとなった。解題では袖崎

教授が昭和戦前期における鉱山業の概要、国内政治機構とその運用、裁判、教育制度の推移、文字詩歌と映画史などを詳述、永原教授が田川市立図書館所蔵の「林田春次郎文書」に基いて、田川郡伊田町（現田川市伊田）でいわゆる十五年戦争突入以降の戦時体制化が着実に進んでいった状況を記述した「戦時体制とファシズムの抬頭」を発表されている。

寄稿論文は長弘雄次九州共立大学名誉教授が「筑豊炭鉱の採掘・採炭技術の歴史」で、技術的な視点からの戦前の変遷を多くの写真、図表を交えながら論述されているが、これは従来筑豊炭田のまとまった技術史がなかったこともあって貴重な論文である。また、槙塚忠穂助教授（人間工学）によって、大正から昭和初期の筑豊炭田マップを遠賀・直鞍地区、嘉飯山地区、田川地区毎に、現在の道路地図上に合計四二五坑を明記されたものに、表層地質図上に展開される全炭鉱の分布状況を示したものを加えた計四枚が作成、折込まれている。炭鉱名には難読のものも多く、すべての坑名にルビが振られた地図の索引がつけられている貴重な労作である。発行部数、販布方法はすべて明治、大正編と同様である。

引き続き最終刊（第四巻）の「昭和戦後編」の編集に入っているが、初校はすでに完成、今後綿密な校正を加えつつ、解題、寄稿論文などの採択方針を決定していくこととなっている。

なお、全四巻完結後、これを一本にまとめて総合索引をつけるという、発刊当初からの基本計画は大学側の予算事情もあって、現在のところまったく方針は立てられていないが、実現に向けての努力を重ねていきたいと考えている。

（ふかまち・じゅんすけ、前飯塚市歴史資料館館長、（株）麻生社史資料室顧問）